続 お薬よもやま話

<17>

黒田の目薬

司馬遼太郎の小説「播磨灘物語」に戦国武将、黒田官兵衛の親元は目薬屋だったという話が出てきますが、作者である司馬さん自身も大阪の薬屋の次男として育ったそうです。

黒田家の本貫地（発祥の地）は近江国木之本黒田にあり、当時その辺りではメグスリノキの樹皮を煎じた液を目に垂らすと今で言う結膜炎などに効果があることが知られていました。

この近江黒田家の子孫の一部が後に備中（岡山県西部）の福岡という地に流れたのですが、官兵衛の祖父、重隆の代になって姫路へ移りました。

当時かなり困窮していた重隆は、その地で黒田家家伝の目薬「玲珠膏」（れいしゅこう）を作って売り出したところ、これが当たって財をなし、有力豪族となったと「播磨灘物語」にあります。

その後、重隆は御着（ごちゃく＝現在の姫路市）城主、小寺政職（まさもと）に仕官し、それを継いだ嫡男黒田職隆は城主に大いに信任されて小寺姓を賜った上、政職の養女を妻に迎え、黒田官兵衛の誕生につながったのです。

このように小説の上では黒田家家伝の目薬「玲珠膏」の大ヒットのお陰で黒田家は家運が上向いて有力武将の道を歩み、紆余曲折を経て、幸運にも明治維新に至るまで筑前藩五十万石の大大名として存続しました。

最近の研究では、メグスリノキの煎じ液には抗酸化成分や抗菌成分が含まれており、結膜炎、目の傷、メイボ、眼精疲労に有効であることが分かっています。

日本に古くから伝わるこうした名薬が、ごく一部を除いて姿を消しつつあり、一抹の寂しさを感じます。